

「8次化」を実現する サーキュラーエコノミーplusのプロジェクト



横浜オリーブプロジェクト



横浜オリーブプロジェクトは、地産地消と休耕地や耕作放棄地の有効活用を目指す持続可能な農業プロジェクト。各地のリビングラボ*1が取り組むオリーブ栽培では、緑区で610本、横浜市内で1,033本のオリーブを植樹しています。2022年3月の時点ですでに耕作面積は緑区で約10,244㎡、横浜市内で約30,000㎡のオリーブ畑が生まれ、今現在もオリーブ畑は増え続けています。SDGsなどを踏まえ地球環境などにも配慮。土壌の能力を生かした土づくりと、横浜市内の公園緑地や街路樹などの剪定枝や刈草を原料とする有機堆肥を使用し、1本の木から8キロものオリーブが収穫できるなど、地域循環による農業の仕組みを構築しています。

*1リビングラボ まちの主役である住民（生活者）が、暮らしを豊かにするためのサービスやものを生み出したり、より良いものにしていくことを目指した新しい地域・社会活動です。世界では欧州を中心に400ヶ所のリビングラボが活動しており、近年日本でも注目されつつあります。



セヤミツラボのハチミツプロジェクト



セヤミツプロジェクトの舞台は瀬谷区。2027年に開催が決まっているGREEN×EXPO2027（国際園芸博覧会）の会場地域として、すでに豊かな自然環境を活かした新たな街づくりも始まっています。そのひとつとして注目したいのが、地元の若者と大人たちが「養蜂」から生まれる「ハチミツ」でまちを盛り上げようと2022年5月に立ち上げた「セヤミツラボ」。瀬谷区内を花が溢れるハチミツの産地にするために活動中です。

ミツバチはたくさんの自然を生かす地球環境にとっては欠かせない昆虫。SDGsの観点からも重要なプロジェクトとして、福祉施設から地域の小学校や高校、商店街なども参画。養蜂を通じて地球や地域の自然を豊かにするだけでなく、多様で多彩な人のつながりも生み出しています。



京急沿線子どもまんなか横浜プロジェクト



京急電鉄と「働わたしたち」が事務局となり、11団体が構成された京急沿線子育てネットワーク「Weavee（ウィービー）」と、子ども・子育てをテーマに活動するリビングラボ。ふたつが連携し、マルシェなどのイベント、京急沿線で活動する子育て団体や企業が連携するネットワークの構築などを行っているのが「子どもまんなか横浜プロジェクト」です。その中でも「働わたしたち」は、ラジオを通して地域と繋がるきっかけを作る「ママ夢ラジオ（全国21拠点）」を運営。ママ夢ラジオ代表でもある竹岡さんは、金沢区の地元有志たちと金沢区ご当地かるた【カナかる！】を制作。地域を元気にするなど子どもや子育て世帯が中心となって人と文化、そして地域の共創を実現しています。



よこはまの未来の作戦会議・実践会議

「未来の作戦会議・実践会議」とは、子どもや若者たちによる学校での学びや地域での活動を通じ、持続可能な横浜の未来を実現していく対話と探究の場です。市民の皆さんが訪れやすくにぎわいが溢れる横浜市庁舎低層部を拠点にしながらも、市内各地域で展開しています。この取り組みは、横浜の子どもや若者が地域課題に関心興味を持ち、その解決に向け多様な大人と共に持続可能な横浜を実現する一環のプロジェクトです。



よこはま共創コンソーシアム



横浜市政策局
共創推進室共創推進課



CITY OF YOKOHAMA

明日をひらく都市
OPEN × PIONEER

本紙に関するお問い合わせ：よこはま共創コンソーシアム事務局
NPO法人KUSC 藤森茂和 MAIL: fujimori.kusc2022@gmail.com



CITY OF YOKOHAMA

明日をひらく都市
OPEN × PIONEER

明日をひらく
地域循環型のまち創り



Next Life Story

YOKOHAMA
CIRCULAR ECONOMY PLUS

特集：横浜からはじまる地域循環型団地

8次化で誰一人取り残さない社会を目指す

20世紀の経済活動が大量生産・大量消費・大量廃棄を前提としていたのに対して、サーキュラーエコノミーは地球環境・気候変動に対応するため、資源のリサイクルや再利用を推進することを旨とした経済活動のこと。横浜市では、市民の誰もが、生き生きと学び、働き、活躍できる経済循環を生み出すという視点から、横浜版地域循環経済として「サーキュラーエコノミーplus」を推進しています。新たな産業の形としてよこはま共創コンソーシアムが循環・持続を目的とした8次産業(8次化)を提案。地域の経済循環によってSDGsを実現していきます。



CIRCULAR ECONOMY PLUS

サーキュラーエコノミーplusとは

<p>ローカル・フォー・ローカル</p> <p>地域のものは地球に還す</p> <p>地域の資源循環と電力・食の地産地消による「気候危機」への挑戦</p>	<p>サステイナブルデベロップメント</p> <p>持続可能な街づくり</p> <p>空き家、耕作放棄地などを有効活用し持続可能な「まち」を実現</p>	<p>ヘルスプロモーション</p> <p>人生100年時代の健康戦略</p> <p>介護、ヘルスケア、スポーツ、生活サービスによる「生涯活躍」社会の展開</p>	<p>パラレルキャリア</p> <p>会社・学校に捉われないもうひとつの学び方・働き方</p> <p>個人に寄り添うフレキシブルな場の創出による「ひと」のエンパワーメント</p>
---	--	--	---

公民連携オープンイノベーション

**公民連携にて社会的なインパクトを生み出すこと
4つの目的をさまざまなパートナーシップによりオープンにすること**

8次産業(8次化)とは

1次産業 農業(生産) + **2次産業 加工・製造** + **3次産業 販売・サービス**

6次化 生産・加工・販売による1次産業の強化

6次化とは、主に農山漁村で、一次産業としての農林漁業を軸に、二次産業としての製造業、三次産業としての小売業等の事業を総合的かつ一体的な推進することで、地域ならではの新たな価値を創出することで、農林水産業を活性化させ、地域(農山漁村)の経済を豊かにしていく取り組みです。

地域が豊かに循環する仕組み

8次化 持続・循環・共創

8次化とは、6次化した農業に脱炭素やサーキュラーエコノミーの視点を加えると共に、福祉・教育・スポーツなど他分野の社会活動と連動させることで、環境・社会・経済の持続的発展を一体的に進め、市民のウェルビーイングの向上を多角的に目指す取り組みです。

団地から始まっている横浜らしい循環型経済

欧米からはじまった循環型経済「サーキュラーエコノミー」。よこはま共創コンソーシアムでは、横浜市が進めるサーキュラーエコノミーをベースに、独自の循環型経済のあり方として8次産業(8次化)を提案。団地と循環型経済の観点から識者による座談会を開催しました。

YOKOHAMA Circular Economy Conversation



横浜国立大学 准教授 藤原 徹平氏



横浜国立大学 准教授 池島 祥文氏



よこはま共創コンソーシアム / NPO法人KUSC 神奈川大学サッカー部 藤森 茂和氏



横浜市政策局 共創推進室共創推進課 関口 晶幸氏

団地から創造する横浜ならではの循環型経済

関口 横浜市ではSDGsを達成し、誰一人取り残さない社会を実現するため、社会・環境・経済の持続的発展を目指す地域循環型経済の取り組みを強化、推進しています。その中で今回は、急速な少子高齢化の進展や身寄りのない高齢者の増加など社会課題の縮図となりつつある「団地」に注目しました。横浜市緑区にある竹山団地と、青葉区にあるすすき野団地、2つの団地の取り組みを主題に、横浜ならではの循環型経済を考えていきたいと思っています。

藤原 そういう意味では、循環型経済に入る前に、横浜の団地の特徴について理解する必要がありますね。竹山団地は、1970年代に竣工しているのですが、環境破壊が進み社会問題となりはじめた時に、自然の美しさを大事にと水と緑の共生というコンセプトのもと、緒方さんという建築家が環境学の先生と共同して設計しています。環境共生の建築物としても、後世に残していく価値がある。そうした団地の窮地を救う意味でも、神奈川大学サッカー部の皆さんが竹山団地に入って活性化しているというのは非常に素晴らしいこと。教育と団地を通じた循環経済が融合していくというのも非常に面白いなと思っています。すすき野団地は、また別の仕組みで団地を含め地域の循環を促しています。団地の皆さんが積極的にワークショップを開いて、全国の団地の取り組みなどを勉強しながら導入して、自分たちの地域・団地を少しずつでも丁寧に変えていっています。地域との積極的な共創でクラフトビールや福祉団体との地域保全、コミュニティづくりなど、住民からのボトムアップからさまざまな循環型経済が生まれています。

誰もが食に困らない団地を8次化で創造していく

池島 団地の課題はたくさんありますが、その中でも少子高齢化や老朽化により過疎化が進み、買い物など簡単には行けない高齢者の方たちが買い物難民になっている現状があります。生きていく上で、食べていくことは何よりも重要です。その課題にどうやってコミュニティをつなげて解決していくか、そんなところも考えていく必要があります。孤独、孤立化している高齢者や子どもたちに対して、子ども食堂の促進なども考えながら健康とか福祉を考えていく必要があります。共助や互助が団地でも重要なキーワードです。

関口 そういう面では、農業を起点とした6次化に加え、よこはま共創コンソーシアムが提案する循環や共創の仕組みを取り入れた「8次化」が、この2つの団地では実現できているということかもしれません。

藤森 神奈川大学サッカー部は竹山団地を寮として使わせてもらいながら、団地内に食堂を開いたり、食堂で提供する食材を地域の休耕地を開墾して、学生自らが作った野菜を使っていたり、大学と団地を含む地域が共創することで、食の8次化が実現しています。提供する料理も、例えば、食堂で介護予防教室を行う際は、

高齢者の方にも食べやすいメニューを工夫し、栄養たっぷりな食事を提供しています。団地に住む高齢者の方には元気を提供し、参加する学生は人間力を上げてもらう。加えて、サステイナブルな農業を通じた地域保全や地産地消を実現する価値あるものだと考えています。

藤原 確かに神奈川大学サッカー部が団地に入ってきたことで、団地の中でさまざまな循環が生まれてきている。高齢者も学生もいきいきと暮らしている。

藤森 竹山団地に入って4年目。はじめは手探りで団地に溶け込むことだけを考えていましたが、今は、団地の新しい取り組みの担い手として、学生が自発的にアイデアを出し、地域に対して自分たちが役立つことがあるかを探しています。食を通じた循環はもちろん、元気を循環させる仕組みを創っていきたいと考えている印象があります。

8次化とは地域から循環を生み出す横浜独自のサーキュラーエコノミー

藤原 「団地の8次化」ですが、もう少しわかりやすく捉えると欧州からはじまった循環型経済「サーキュラーエコノミー」をベースに、地域内の循環と共創を推進しながら、団地の内外に市民が生き生きと働くことのできる場や機会を増やしていくということでしょうか？

関口 市域の農業の担い手が高齢化し、減少していくなかで、休耕地や耕作放棄地を活用したり、地産地消を進めることで、仕事として農業に関わる多様な市民を増やしていく必要がある。その意味で竹山団地で暮らす神奈川大学のサッカー部の若者たちは、このような新しい農業の担い手となっていると思います。

さらに、団地を拠点に農業、工業、商業、福祉、教育など、地域のさまざまな産業や働き手を結びつけ、地域内で資源やお金を循環させることで、みんなで地域の豊かさを生み出し、分かち合う仕組みをつくるのが、団地の8次化であるともいえます。

池島 例えば、世界のサーキュラーエコノミーを見渡せば、大企業が多く取り組んでいます。しかし、ここで取り上げている2つの団地については、ミニマムですが、団地内や地域に循環の暮らしをリアルに実現しています。世界の潮流とは異なりますが、地域に根ざしたサーキュラーエコノミーもある、ということですね。だから、横浜では、地域から循環を生み出す「8次化」を新たな仕組みとして発信していけば良いのではないのでしょうか。事実、竹山団地とすすき野団地の活動は、横浜のみならず、少子高齢化を迎える日本すべてに知ってもらいたい活動だと思います。

01 NEXT LIFE YOKOHAMA

竹山団地

高齢化を解決する50年目の若い団地



1971年に横浜市緑区に竣工した竹山団地。最盛期には住人が1万人を超えるマンモス団地として、横浜の新しい文化形成の一翼を担いました。自然との調和を目指したその建築美は、全国でも注目され、団地のセンター地区が2021年にはDOCOMOMO Japanによる「日本におけるモダン・ムーブメントの建築250選」にも選ばれたほど。団地ファンの憧れの建築となっています。

しかしそんな竹山団地であっても、2023年には人口が最盛期の4割程度となり、団地の空洞化に直面。さらには、住民の50%近くが高齢者。団地の運営や未来への見通しは明るいものではありません。この社会課題を解決するため、連合自治会、竹山地区の医療機関等が連携し、竹山地域の持続可能で豊かな未来の実現などを目指し活動する「竹山未来先取り倶楽部」がスタートしました。2020年3月には、団地の開発者であり賃貸住宅や店舗を所有する神奈川県住宅供給公社と神奈川大学が連携協定を締結。公社賃貸住宅の上層階空室を察的に使用。同学サッカー部員が入居。2023年9月には59名の学生が住んでいます。連合自治会の全面協力のもと、地域活動に参画。団地の活性化に貢献しています。

学生寮と食堂

「住民と学生がふれあう交流団地」

共創パートナー：住宅供給公社×自治会・学生



2020年から竹山団地の空き部屋・店舗をサッカー部の寮・食堂として活用しています。現在は59名の部員全員が団地住民として寮生活をし、自治会の行事や清掃活動に参加しています。また、2022年4月からは学生食堂に地域交流機能を加え、スパイス食堂とカフェの運営をスタート。日常的に地域の方々とふれあうことで身近な課題や団地生活で困っていることを肌で感じています。その課題解決を学生自ら考え、仲間とともに行動することを通じ、様々なことを学び経験を積んでいます。

スマホ教室と放課後学習

「子どもも高齢者も学べる団地」

共創パートナー：地元医療機関・学校×自治会・学生



竹山団地では、医療のデジタル化で取り残された高齢者に対して、地元の医療機関や自治会が中心となり、スマホ教室を開催しています。学生は高齢者のサポート役として参加し、医療介護のノウハウを学んでいます。また、児童減少が深刻化する地元小学校の子どもたちをサポートするため、社会福祉協議会や自治会と一緒に放課後学習支援をしています。高齢者も子どもも多世代交流する共創のあきらめの実現を目指しています。

介護予防教室

「心も体も健康な福祉団地」

共創パートナー：自治体×自治会・学生



2023年度から横浜市介護予防・生活支援サービス補助事業の認定を受けて、団地のサッカー部食堂で介護予防教室などを定期開催しています。高齢者と学生が食堂スペースを活用して、楽しみながら筋トレやストレッチなど運動プログラムの実施や運動後に栄養バランスのとれた食事を一緒に食べる機会を提供しています。このほか、食堂の空き時間を地域に開放して、ふらっと立ち寄れる居場所づくりなど、地域住民と学生がつながる拠点になっています。

循環する農業と食

「地域に栄養をつける美味しい団地」

共創パートナー：地元企業・団体・学校×自治会・学生



竹山地区の隣に広がる神奈川区羽沢地区の休耕地をサッカー部の学生が再生。約600坪の畑には、四季を通じてたくさんの野菜が実ります。生産者は学生だけではなく地元の高校や地元企業の方々も畑に来て農作業を手伝う多世代交流農園となっています。新鮮で安全な食材が団地の食堂で美味しい料理となり、近隣に住む高齢者をはじめ、多くの住民が食事を楽しんでいます。休耕地での農業は竹山地区に多くの循環が生み出し、喜びを分かち合う8次産業化が芽生え始めました。

竹山団地を未来へ循環させる共創の8人



神奈川県住宅供給公社
水上弘二

団地を察にする、若返りの術

団地活性化に大切なことは、地域の特性分析やお住まいの方々の丁寧な対話、動機や熱意を持った方々との連携、そのうえで収益性と公益性の両立を意識した取組みを断続的に展開していくことだと考えます。

今回のプロジェクトは、神奈川大学サッカー部大森監督の総合人間教育論を拝聴したのがきっかけです。その思いを受け、大学と当公社との更なる連携の可能性を踏まえ、地域コミュニティが活発な竹山団地にある公社賃貸住宅を察的に活用していただくことを着目し、大学と公社の連携協定を締結しました。連合自治会の支援のもと、大学との連携を開始して4年が経過した現在は、大学やNPO法人とともに空き店舗を活用した地域課題解決型プロジェクトを進行中です。今後は、竹山団地の皆さん、そして学生にとっても原風景となるような竹山団地であり続けられたら良いと思います。



医療法人社団晃徳会
横山医院在宅・緩和クリニック
横山太郎

団地の多世代交流が孤立を解消する

少子高齢化がすすむ竹山団地。核家族化などもあいまり、厳しい状態になってから入院するかたが増えています。そのような中で、元気なうちから関わりをもつことができないか考えるようになりました。

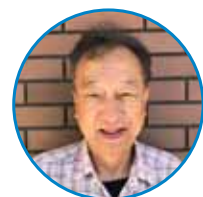
そのためには医療者だけでは厳しく、地域のひとと共に活動する必要があると感じました。そこで竹山団地のかたと共に「スマホセンター」を設立しました。神奈川大学サッカー部の学生には高齢者の方にスマホを教えるサポーター役として参加。団地内にてスマホ教室を開催しました。スマホセンターの役目は、スマホの利便性を伝え、使い方を覚えてもらうことに加え、若者と高齢者との多世代交流。新しい医療や介護の姿を実現できると実感しています。



神奈川大学サッカー部
監督
大森西三郎

部員の成長と地域の笑顔に貢献したい

神奈川大学サッカー部は、「質実剛健」「積極進取」「中正堅実」という本学の建学の精神を標榜し、日々の活動では「F+1」という理念を大切にしています。Fとはフットボール。+1とは別の新しい何かにチャレンジすることにより選手としてはもちろん、人として成長することを目指します。竹山団地に部員を住まわせていただいた理由は、部員の身分である勉強とサッカーに加え、+1として地域活動を取り組むのに最適な場所と考えたからです。少子高齢化という竹山団地の課題は、日本全体の共通課題。竹山団地の住民として継続的にソーシャルキャピタルを高める活動に参加することは、部員の成長、地域の笑顔づくり、そして日本の明るい未来にも貢献できると考えたからです。人とつながりの中で自分が生かされていること、また、多様な多世代の人々が共に助け合うことが大切だという学びを深めています。



竹山連合会自治会
吉川 勝

団地に、地域に、元気が灯る

竹山団地は45%ほどが高齢者。築53年が過ぎて団地の老朽化も目立ってきました。若い時には気にならなかった坂道や階段など負担がかかる場所も出てきました。そんな中、病院や神奈川大学サッカー部が学生寮として入居してくれたことで地域が明るくなった。特にコロナ禍の中での交流は地域に活気を与え高齢者を元気にしました。小学生もよく見かけるようになりました。子どもたちが落ち葉清掃に参加したのも学生の影響です。

自治会は、どんな時でも「あなたを守るのは人と人の絆です。」という思いを関係者の皆さんと共有したい。特に同じ団地に住むサッカー部の皆さんには団地のためだけではなく、自分の本業や目的、夢を忘れないでください。地域は自分を捨ててまで地域貢献を求めてはいません。共に同じ目的を持った同志として楽しい月日を過ごせればと思っています。



横浜市立竹山小学校
今村公子

子どもたちが地域で豊かに育つ社会に

竹山小学校では児童数が徐々に減少。今は全学年単級です。子どもたちの人間関係が固定化してしまふことが課題だと感じています。

そんな中、放課後学び場事業において、神奈川大学の学生の皆さんが子どもたちの学習をみてくださっています。大学生や地域の方と関わる機会があることで、人との関わりを学ぶ機会にもなっています。これは希望ですが、多世代という点においても高学年の体育の授業に、ゲストティーチャーとして関わっていただけると、運動することの楽しさが伝わるのではと思っています。

学生の皆さんをはじめ、そこから生まれた関係によって子どもたちがさらに元気になり、それが高齢者の元気を作り、地域の元気（活性化）へ続いていく。またそれが子どもたちの健全育成につながる循環になればと思います。



TAKEYAMA
PUBLIC HOUSING



医療法人社団恵生会
竹山病院
大矢美佐

医療から生まれる共助の暮らし

竹山病院は竹山団地と時を同じくしてこの竹山団地に設立されました。現在は、高齢化などによるさまざまな問題に対応するため救急医療から地域と在宅をつなぐ地域包括ケア病院へと医療機能を変遷。竹山団地と共に歩んできた医療機関として、高齢化が進む竹山団地の問題解決の一助として住民の有志の方々と立ち上げたのが、「竹山未来先取り倶楽部」。活動のひとつとして、医療のデジタル化で取り残された高齢者に対して神奈川大学サッカー部の協力のもとスマホ教室を実施。デジタル利用を推進しながら、医療介護のノウハウを通じて、若い世代と高齢者が共に暮らし共創のあきらめを実現しています。

50年前の団地のあり方は変化している社会背景に合わせた安心を団地内に提案できればと思っています。そして地域包括システムを循環させる暮らしを竹山団地を実現できればと考えています。



竹山地区社会福祉協議会
青木良博

子どもと高齢者の笑い声が聞こえる

竹山地区ではひとり暮らし高齢者などの見守り活動の担い手不足など、深刻な課題となっています。この課題に対して、神奈川大学サッカー部の若い力は団地を少しずつ元気にはしています。清掃活動や竹山池のかいほりをはじめ、スマホ教室・今年から始まった神大食堂での介護予防教室、フリースペースの活用等で高齢者との交流が促進されています。竹山小学校の児童に向けた学習支援も。団地の活性化が、学生から循環した結果、住民と学生のおしゃべりや笑い声が聞こえてきます。

今後は、竹山団地住民と神奈川大学との協働で、「健康・つながり・まち」づくりプロジェクトが展開されます。これは少子高齢化の暗雲漂う中の一筋の光です。どんな状況でも我々は今できることをひとつずつ積み重ねていく。竹山が「ひとりひとりがいきいきと生活できる」パラダイスであることを祈っています。



神奈川大学サッカー部
学生代表
箕輪実潤

たくさんの自己発見で成長できた

私は竹山寮生の1期生として神奈川大学サッカー部に入部しました。入部した時は、今、竹山団地で行われているような活動は想像もできなかったです。監督からの説明もありませんでした。(笑)今年で4年目を迎えたが、この学生寮はとても住み心地が良くサッカー活動以外でも、食堂やスマホ教室における高齢者とのコミュニケーションなど色々なことを経験できています。団地の皆さんと交流することで、自己発見を繰り返しながら、自分自身が何を感じるのかを知ることができたのは自身の成長に繋がりました。

学生にとって重要なのは大学の4年間で自分が今後歩いていく道を決め、それに納得することです。ここに住んで、人基準で考えること、最後は人と人とのつながりが良好であるかどうか大切だということ自分を重要視しているのだと知ることができました。

※QRコードから各氏のホームページへ移動します

02 NEXT LIFE YOKOHAMA すすき野団地

住民が「建築」する循環型の団地暮らし



すすき野団地は1974年に分譲をはじめ、全820戸の大型団地。1460人が住むこの団地内でも、住民の少子高齢化および高齢者の一人暮らしによる孤立化、施設や設備の劣化、団地をまとめる組織力の低下など、多くの問題が存在します。そんな団地が今なぜ注目されているのか、それは住民たちが自分たちの力（セルフビルド）で課題解決のために、さまざまなプロジェクトを団地外の人たちと共創することで作っているから。ハード面では、団地自体を若返り化していること。例えば、すすき野団地のコンクリート強度など自分たちが先導して調査をスタート。今後、中性化試験（劣化試験）の実施を予定。自分たちで調査するからこそ、まだまだ元気な団地として自信が持てる。また、ソフト面では、全国の団地の取り組みを学びながら、循環型の団地づくりを目指し、同じ志を持つ外部の人たちとつながりながら、団地を閉じるのではなく、地域に開いていくことで新しい互助の形が生まれ、高齢者の不安を安心に変え、孤立させることがなくなりつつある。地域と循環し共創する団地。つまり8次化が垣間見られるすすき野団地。その取り組みをご紹介します。

青葉区の地域創生

「団地ホップで創る地産地消ビール」

共創パートナー：パン屋×グリーン×暮らしの共創



きっかけは団地の緑化。ただ緑を増やして住環境を良くするのではなく、その植栽でコトが始まるものとして選んだのがビールの原料となる「ホップ」栽培。ホップとともに必要な小麦は、同じ青葉区にある農福連携の福祉事業所で作る。それを世田谷にあるビール醸造所に依頼。完成したのは、すすき野地域にある青葉区の地域循環、そして活性を願った「青葉エール」。福祉事業所と団地、地元商店街のお店などが共創で産んだ循環型のシステム。団地のみんなが可能性に酔いしれました。

取り残さない生活支援

「みんなが頼れるコミュニティマネージャー」

共創パートナー：自治会×暮らしの共創



近年ではシェアオフィスやビジネスコミュニティの場において、ビジネスとビジネスをコミュニケーションしたり、その場の状況をいち早く察知し、適切な行動へと導く役目の人をコミュニティマネージャーと言います。すすき野団地でも、自治会を中心としたスタッフがコミュニティマネージャーのような意識を持ち、住民一人ひとりを見守り、気にかけるようになっています。団地内の過疎化という言葉があるように孤立しない仕組みを作り、高齢者の安心安全を団地内に循環させていきます。

団地住民の健康長寿

「団地暮らしに安心を導く心身の相談所」

共創パートナー：パーソナルナース・地域ケアプラザ×自治会



「まちの保健室」は、すすき野団地の自治会などの協力のもと株式会社パーソナル・ナースが運営する「看護師」がいる保健室です。まちの保健室は、病院に行くほどでもない時、少し体調がおかしいなど不安に思った時など、気軽にに行ける場所として運営しています。それ以外にも、すすき野地域ケアプラザとも連携。地域包括支援センターが団地に隣接し、健康相談から生活の細かな相談などを受け付けています。この2つの施設との連携がすすき野団地に安心を導いています。

団地の共助と互助

「食べ物も日用品もお裾分けのおかって」

共創パートナー：自治会×暮らしの共創



空き家の一室を利用して団地内に多世代型交流拠点「だんちのオカッテ」を作っていく取り組みを考えています。オカッテでは取り組んだ包括ケアとしての食事支援や住民が安心して集える居場所づくり、子ども見守り・支援として、団地の高齢者と子どもたちが交流できるようにするなど、団地住民が好きなように使える場の活用を想定しています。例えば、作りすぎたお惣菜のお裾分けが行われたり、道具の貸し借りなど互助の場を設けることで団地の暮らしを持続可能な循環型にしていきます。

すすき野団地を地域へ循環させる共創の8人



青葉台パン屋コペ オーナー
横浜あおほ小麦プロジェクト
奥山 誠

団地産のホップで作るビール

私たち「横浜あおほ小麦プロジェクト」は、青葉区で収穫された小麦を地産地消で循環させるプロジェクト。現在は、青葉区の飲食店を中心に、パンやうどん、揚げ衣、お菓子、ビールとさまざまな原材料に使っています。すすき野団地との出会いは、同じプロジェクトに参加している同団地に住む小柴さんとの出会い。小麦とホップがあれば地産地消ビールも作れるのがきっかけです。団地の緑化活動としてホップを育てながら、地産地消クラフトビール「青葉エール」として商品化、団地のイベントでも提供することができました。団地から生まれた青葉産のクラフトビール。その生産過程では、一次産業者として小麦の栽培に取り組み障害者の方がいたり、団地に住む高齢者がホップを育てていたり、地を豊かにする多様性がある活動だと思っています。



株式会社東邦レオ
尾畑洋一郎

団地を見るのではなく地域を見る

すすき野団地の敷地における植栽管理やコミュニティ醸成のお手伝いをしています。街に接する外周部の花壇デザインやホップを含めたお手入れのサポートなど、すすき野団地のボランティア団体すすき野ガーデニングクラブさんと連携した活動を進めています。このように、地域を巻き込んだプロジェクトに参画することで、視点が「団地」から「地域」に変化。社内の意識も「すすき野団地を良くする」から「すすき野団地を起点に地域を良くする」に変化しました。今後は「未来に住みつなぐ100年団地」のテーマと連動して高経年団地を起点としたこの地域を、次を担う子育て世代に対してどう魅力的にしていけるかにチャレンジしていきたいと考えております。室内の住み心地UPや魅力的なコミュニティ形成により、「選ばれた団地・選ばれた地域」を実現していきたいと考えます。



横浜市すすき野
地域ケアプラザ
小藪基司

自分らしく生きる団地づくり

すすき野地域ケアプラザは地域包括支援センター、地域活動交流、生活支援体制整備事業、居宅介護支援事業を行っています。中でも地域包括支援センターは高齢化率の高いすすき野団地との関わりが多く、高齢者の方からは認知症や介護保険に関する相談もいただきます。ケアプラザは区役所まで行かなくても身近な場所で介護保険や福祉保健の相談を受けられるのが利点です。「ケアプラザには色々な専門家が揃っているのでも頼りになる」という声もあり、私たちの励みになっています。すすき野団地には高齢者、現役世代、子ども、外国にルーツを持つ方など多様な方の生活があります。私たちはケアプラザの機能を活用して、お住まいの多様な方々がケアに満たされ、自分らしく生きられるように、「選ばれた団地・選ばれた地域」を実現していきたいと思ひます。



社会福祉法人グリーン
長谷川雅一

福祉との関わりが団地を豊かに

グリーンでは農福連携として、農作業をはじめ、収穫した野菜の販売、ドライベジタブルやドライフルーツ加工・製造、販売と6次化を実現しています。農業をすることで、利用者さんたちが社会に出ていくきっかけが増えたり、街の中で、地域の人から声をかけてもらったり、ファンの方が増えていくことで、利用者さん自身が地域で生きているという実感を持ち、喜びにつながっていると思います。すすき野団地とは間接的にビール作りや自社の商品を販売いただいたりたくさん関わりがあります。グリーンの課題がすすき野団地の中で解決すること、はたまたすすき野団地内の課題がグリーンの取り組みで解決することができる、そんな互助の関係で成長していくことができればと思っています。まだ具体的ではありませんが、今後も課題をチャンスに関わりを持って社会作りの一歩を踏み出せたらと思っています。



団地管理組合法人
すすき野住宅
佐藤正人



築50年。若い人が入る団地へ

少子高齢化が深刻なすすき野団地。次世代を担ってくれる管理組合・自治会活動の後継者がいないのも大きな不安です。団地の活動について、「無関心」の人が多いのが実情。そのような中、外部の企業や団体がすすき野団地を関心ごとと捉え、共創していく事例が増えてきました。地域ケアプラザやまちの保健室、福祉事業所が寄り添ってくれていますがたいへん心強く思っています。先に述べましたが、少子高齢化の問題を抱えながらも、団地にも若い人たちが少しずつ増えてきている印象があります。住民主体の「一般社団法人団地暮らしの共創」ができて活動が活発になったことも大きく、地域を巻き込んだ共助・互助の小さな成功体験を積み上げていくことで、理想の団地暮らしにつながっていくように感じます。すすき野団地を思う人たち同士、「対話」しながらより良い団地を創造していきたいですね。



SUSUKINO
PUBLIC HOUSING



社会福祉法人緑成会・
桃の実
濱谷 透

社会に触れ合いながら団地で働く

私たち桃の実、定期的な活動として「広報よこはま」などの配布物のポスティング及びセット作業を請けております。また、落ち葉集めといった清掃作業やマルシェなどのイベントなど地域活動に積極的に参加しています。桃の実としては、利用者がすすき野団地に清掃活動などで関わること、地域の方々と直接顔を合わせ、ご挨拶や日常会話、環境に触れさせていただけるので、仕事への責任感や達成感、表情の変化を知ることができず。また、皆さんが温かく受け入れていただけるので「団地を居場所」として安心安全に過ごすことのできる場所になってきていると感じます。今後は、団地住民の方々と「利用者自身が楽しいつながり」を大切にしながら、持っている力を発揮できる社会の場として未来につなぐことが出来ればと思っています。



株式会社パーソナルナース
横山郁子

安心と健康を創る、まちの保健室

すすき野団地に隣接した「まちの保健室」では訪問看護師が中心となり高齢者の健康相談を行っています。看護師だからこその医療や介護の幅広い相談ができることが特徴です。また健康に関するさまざまなイベントも実施。高齢者の方の憩いの場としても機能しています。現在、まちの保健室には毎月100名以上の人が利用。すすき野団地に「まちの保健室が出来て本当に嬉しい！」「ここに来るとみんな話せて楽しい！」と言ってくださる皆さんの声こそが、まちの保健室の存在意義。今では、「誰かの役に立ちたい」とボランティアを申し出て下さる方も増え、人とのつながりがたくさん生まれています。今後は、まちの保健室が、すすき野団地に住む方の総合相談窓口となり、あらゆる専門家を通じて、不安を解消できる仕組みを作りたいと思ひます。



一般社団法人団地
暮らしの共創
小柴健一

助け合い、支え合い、分かち合える

すすき野団地では、住民の高齢化や住民の多世代化により、課題が多様化。住民だけでは課題解決が難しい状況になってきました。未来を担っていく若い世代と共有できないことも団地の老朽化を促す大きな課題です。私たちは、その対策として「一般社団法人団地暮らしの共創」を設立。同法人を窓口にして、これまで外に出していたお金や仕事を団地の中で循環させていく「地域循環型経済」の仕組みを導入。例えば、ホップ栽培や団地の一室をサステナブルな使用を目的とした「だんちのオカッテ」など「古い団地だけ、魅力にあふれる団地」と若い世代に感じてもらえるような「新しい団地」づくりにチャレンジしています。私たちが望むのは、ここに生きるすべての人が「助け合い」「支え合い」「分かち合い」ながら幸せを享受できる団地。そんな暮らしを導きます。

*QRコードから各氏のホームページまたはSNSへ移動します